

1. 開催年月日：令和8年8月25日(火) 15時～

2. 開催方式：対面、web会議ツールにて実施

3. 委員(順不同・敬称略)

出席：鈴木 嘉一・宮崎 美紀子・砂川 浩慶・山川 鉄郎・馬場 康夫・尾形 敏朗・倉田 真由美

web会議ツールにて出席：神田 由築

放送事業者

代表取締役社長：宮川 朋之

取締役：桑田 靖

プランニング局長：小西 福太郎

プランニング局：三瓶 祐毅（編成部）、八巻 洋平（編成部）、山崎 桃子（編成部）

コンテンツ制作局：海川知里（プロジェクト推進部）

番審担当：澤 尚志、碓井 恭子、大谷健太郎

4. 議題

（１）審議事項：時代劇専門チャンネル『風間亭 時代劇おもいで噺』について

（２）報告事項：日本映画専門チャンネル「『リップヴァンウィンクルの花嫁』10th Anniversary」について

5. 議題（１）

子役時代より50年以上第一線で活躍し、華麗なる実績を誇り、テレビ時代劇の黄金期を語る上で欠かせない風間杜夫。俳優として多才ゆえに、あえて時代劇に絞って活躍を語る機会が少なかったが、喜寿を迎える4月の節目に時代劇界の立役者の功績にスポットを当てた特別インタビュー番組を、5月16日に放送した。合わせて、ドラマ、舞台、落語、アニメと多彩な作品を2か月にわたる特集を組んだ。

【審議のポイント】番組や企画、作品について、自由闊達なご意見を伺いたい。

6. 議題（１）審議内容 ※文中敬称略

- ・時代劇専門チャンネルらしい硬派な人間ドキュメンタリーを期待したが、『スチュワーデス物語』やつかこうへいへの言及がなく、ひとり語りが軽妙だったため、本人出演による番組案内的な作りだと切り替えて観た。風間の出演作は数が多いが時代劇史の大作ではない。しかし運動神経の話や下町奉行と鼠小僧の奇抜な設定など、各作品に独自の面白さがある。こうしたニッチでB級感のある特集企画自体がチャンネルらしいマニアックさに満ちていて魅力的だった。
- ・風間に時代劇を語らせる企画は素晴らしい。子役時代の話を引き出した点も良く、チャラ男風の魅力的な語りは最高だった。一方で構成・演出に惜しい点がある。個人史や母親との関係は本筋から外れ、時代劇やユニオン映画史に徹してほしかった。冒頭の椅子着座はシニアに不自然な心配を与え、正座に繋がらず違和感がある。またスタッフの差し込み笑いが興を削ぎ、落語の種明かしは最後にして驚かせるべきだった。志が高い分、時代劇史に集中してほしかった。
- ・風間と時代劇、落語が知らずとも30分楽しく見られた。ユニオン映画好きとして、作品を集め

インタビューを挟む編成は有料チャンネルらしく素晴らしい。もし自分が聞けるなら、(1) かつての大御所たちを今どう感じるか、(2) 現代劇にも出る彼がこれからの時代劇をどう考えるか、を尋ねたい。作品軸か俳優軸か迷うだろうが、時代劇専門チャンネルなら今後も工夫して特集を続けてほしい。

- ・ 子供時代に見た時代劇の主演俳優がアイドルだったので、風間の一人語り30分は見事なキャスティングだった。話し方が巧みで、里見浩太朗の麻雀話やスタントマン多用の話など生き生きと語られ、80年代にファンだった層には刺さる内容。あっという間の30分だった。
- ・ 世間は『蒲田行進曲』の印象が強いが、私は日活ロマンポルノ期の風間に印象がある。田中登監督作群は異彩で、当時は朴訥な青年だったが舞台や映画で地道に成長し、今回の堂々たる一人語りに感慨を覚えた。主演時代劇でも控えめに作品を支える芝居が魅力で、二枚目に溺れない名バイプレイヤーの歴史を感じられた。企画者の情熱が伝わる番組だった。
- ・ 一人語りの手法は洒脱で面白く、大御所に光を当てて時代劇の良さを伝える構成は成功している。地上波では難しい内容で、テレビを文化的な媒体として再定義する視点も示唆的だ。人気俳優を手がかりに時代劇視聴へ誘うのは有効で、私も再び時代劇を観たいと思った。ただ紹介作品の多くが既に放送終了しており、番組放映と連動した一挙放送があればより効果的だった。
- ・ 風間は子役時代から長い歴史を持ち、森繁や若山を「先生」と呼ぶ言葉遣いに敬意が滲む。北大路や里見らの大御所とは異なる視点で時代劇に貢献してきた点が興味深い。風間が『銭形平次』を引き継いだ点も改めて感慨深い。『スチュワーデス物語』やロマンポルノ映画の印象が強い彼が時代劇史でも貴重な存在であると再認識させる贅沢な構成だった。
- ・ 当初は時代劇切り口に首をかしげたが、あえて時代劇面から名優を切り取るアプローチは面白い。男性俳優の裏話が中心だったので、共演女優のエピソードも聞きたかった。伏し目がちな素顔と舞台での高いテンションの落差が彼の個性で、役に寄せていく演技派でありつつ主役も張れる。30分は短く、1時間でじっくり聞きたかった。映画や現代劇寄りの特集も期待したい。

これに対して弊社からの回答は以下の通りであった。

- ・ 事前取材で子役時代の撮影所話など貴重な記憶が得られたためそこを軸に構成した。落語家としての一人語りを前半椅子、後半正座で差をつける案を採用した。視聴率は時代劇と同等で、ご本人やマネージャーからも時代劇出演を振り返る機会になったと感謝された。自身の情熱を番組に結実させられた。
- ・ 企画は担当者・海川の強い時代劇愛から生まれ、立ち上げに3年を費やした情熱は評価する。昨今はヒット作の模倣が多くクリエイターが臆病になっているが、個人の情熱を愚直に貫き通した姿勢を評価したい。立ち上げまでに3年を費やしたとのことだが、もっとテンポ良く果敢に挑戦し、後に続く若い世代にその背中を見せてほしい。一方で、とても惜しい番組だったと感じるのも事実だ。地上波を真似てスタッフの笑い声を入れた点は有料放送として決して正解ではない。お金を払ってご覧いただくお客様に向けたものづくりとして、プライドを持つべきだ。審議委員の先生方からいただいたご指摘や評価は、我々スタッフにとって大きな財産となるはずだ。

7. (2) 報告事項

日本映画専門チャンネル「『リップヴァンウィンクルの花嫁』10th Anniversary」にて、2016年に公開された同作公開10周年を記念し、4Kアップグレード版を制作、8月22日にテレビ初放送した。3時間に及ぶ長編だが熱心なファンに長く愛されてきたこともあり、6月13日には劇場公開10周年の特別上映イベントを都内で開催。チケットは即日完売だった。岩井俊二監督とプロデューサーが登壇し、黒木華などの出演者がメッセージで参加する模様などを、本編後に特別番組として放送した。

8. 連絡事項 次回、第99回番組審議会は2026年11月10日(火)、16時から対面、オンラインのハイブリッドにて開催予定。